

宇陀を駆けた人々

8
本居宣長篇 2

萩はらの里

菅笠日記（すががさのにつき）によると、本居宣長（もとおりのりなが）らの旅の行程は次のとおりです。

明和9年（1772）3月5日…松坂（松阪）↓青山、6日…青山↓名張↓室生（大野）↓榛原（萩原）、7日…榛原↓西峠↓角柄↓吉隠↓長谷↓多武峰、8日…多武峰↓吉野、9日…吉野、宮滝、10日…吉野↓飛鳥、11日…飛鳥↓櫃原、12日…櫃原↓桜井↓榛原（萩原）、13日…榛原↓室生（田口）↓御杖↓美杉（多気・石名原）、14日…美杉↓松坂（松阪）。この行程から、行きは「伊勢表街道（あお越道）」、帰りは「伊勢本街道」を通ったことがわかります。

3月6日、一行は三本松宿を通り、当時から有名であった大野寺の磨崖仏（弥勒菩薩像）を参拝しています。この日のうちに初瀬まで歩く予定だったのですが、雨が降り、疲れてしまったので、初瀬で泊まるのをあきらめ、榛原（萩原）に泊まっています。

宣長は、「萩原」という地名をなぜか懐かしく思い、次のような歌を詠みました。

うつつしても ゆかまし物を 咲花のをりたがへたる 萩はらの里

（もし、萩の咲く秋だったら、その花の色香を袖に染みこませて行くものを、咲く花の季節を違えて来たのは残念だ。この萩はらの里）

萩原という地名から、宣長は「ここ萩原を訪れるのが3月ではなく、萩の花が咲く秋だったら良かったの」などと思ったのでした。



文・柳澤一宏（文化財課）

人権

秋深き 隣は何を する人ぞ

松尾芭蕉の有名な句のひとつです。みなさんは、この句の意味をどのようにとらえますか。最近では、「隣に住んでいる人

は、何をしている人かわからない」と、とらえている人が多いようです。本来の意味は、秋が深まってきて、ふと、「隣の人は今、何をしているのかな？」と感じてしまう、人懐かしさを表しているのだそうです。

高齢化の急激な進行により、一人暮らしの方々が増え、介護や認知症などの現実が、くらしの中の大きな不安となつていきます。過疎化の進行もこうしたことを余儀なくさせている面があります。以前は、「向こう三軒両隣」という言葉に表されているように、ご近所どうしのつながりや支えあいの中で暮らしている光景があちこちで見られましたが、昨今、人と人とのつながりが希薄になり、無縁社会といわれる状況がじわじわ広がっていることに危惧を感じます。

人は社会の中で、人とのつながりの中で生きていくことが必要です。人との関わりは、わずらわしさがあるかもしれませんが、「あたたかさ」や「やさし

さ」を見いだすことができます。今一度、「つながり」「支えあい」ということを日常に生かすことができているかを見直し、位置づけていくことが大切です。

「人権のまちづくり」を目指し、「みんなが力を合わせて、自分たちのくらしをしっかりと見まわろう」という活動が各地域において進められています。人の暮らしを支える大事な要素のひとつとして、防火防犯意識の高揚があげられます。消防に対する正しい理解と認識をさらに深めるとともに、地域ぐるみの防災体制の確立に資することを目的として、昭和62年から11月9日を「119番の日」と定められています。防火防犯の活動とも連携しつつ、私たち一人ひとりが、孤独を感じることなく、安心して暮らすことができる社会づくりを目指して、一層の努力を重ねていきたいものです。

